

合宿報告書

今回の合宿は、2009年5月29日から31日の期間を新潟県十日町市松代付近の田んぼにてお米の苗植えを体験した。天候は不安定で、日差しや小雨がなどの山の天気不安定さを実感した。5月30日の朝から16時ごろまでは雨に濡れず作業が捗った。私を含めてゼミ生4人は、先発組として、30日の朝から田んぼでの草採りを行ったのである。この作業は、田植えの最初の工程である草取りである。この草取りは、田んぼに根付いている雑草などが苗の栄養分を搾取しないようにするためである。また取った雑草を田んぼの底深くに埋めることで腐葉土として再利用する循環型の田植えである。草取りでは、根付いている雑草を根っこから取らないといけないことから田んぼ全体を重点的に見回らないといけなかったのである。

次に実際に苗植えであるが、苗の植え方は、大体3本1セットで縦横30cmの感覚で根を揃えて田んぼに植えるのである。苗植えは、縦横に1列ずつなるべく均等に植えなければならない。何故なら収穫の際や成長を重ねる毎に根が広がり他の苗の栄養分が均等に摂取できないからである。田植えの際、参加者全員でこの作業を1列ずつ順に行わないといけけないのだが、列が乱れ、あまり綺麗とは言えない形になってしまったのが残念で仕方がなく感じるのである。田んぼの地形を熟知し、多少屈折している田んぼであることからその地形を考慮して田植えをすることが必要であったのではないだろうか考えるのである。人の手で行うからには、機械のような正確性は落ちるかもしれない。しかし意識して行えば、機械よりも美しい田植えができるのではないかと考えるのである。今後機会に巡り合えたら今回気付いた点に留意して田植えに挑みたいと考えるのである。

最終日の31日では、30日の残りの田植えをし、その後に「ぼっちゃん南瓜」を植えるための苗床を作るために、切り立った地層や落ち葉などを鍬やスコップ、シャベルなどでトラックに山盛りに載せ、苗床を作る場所まで運び、ある程度土と落ち葉や枝などを分けて苗床を作るのである。苗床を作る際に、まず土だけを丸く敷き、その周りに落ち葉や枝が混ざった土を盛るのである。その後に栄養分として米糠を混ぜ、2つ苗を植えたのである。その後、切ったウドの葉や茎を苗床に被せれば「ぼっちゃん南瓜」の苗床、苗植えの完成である。その後、使用した道具を洗い作業場を掃除して合宿のカリキュラムが終了したのである。

今回の合宿で私は初めての農作業である田植えを体験したが、予想以上に大変な作業であることを実感したのである。まず田んぼの中での移動が出来ず、泥に足を取られ身体のバランスを制御することがままならなく、何度となく倒れそうになったことが難儀であった。他にも鍬やスコップ田んぼを均す道具など使用したことがない道具が多く、使い方や力の入れ方などが分からず、棚田倶楽部の方々に様々な助言を頂いたのである。特に道具は、腕の力で扱うのではなく、身体全体で腰の力を使って身体のパネを利用することが重要なポイントであることを教えていただいたのである。

また『21世紀の水とコメ』を講読して、世田谷・棚田倶楽部の発足の背景と現在も続いているその向上心に驚嘆の思いである。中でも善は急げと現地に向かい直接交渉し、完全無農薬・無化学肥料での米作りという限定条件のもとで米作りを行い、達成する気概は並大抵の覚悟では到底敵わないと感じた。様々な創意工夫を重ねて現在の世田谷・棚田倶楽部が存続していることにたゆまない努力を感じると共に、その現場に自身も2泊3日という短い期間であったが参加できたことに例えようのない充足感を感じるのである。

今回の合宿を通して、食、健康、環境、農業が循環していること実感したのである。何故なら、よりよい環境が整ってこそ農業が充実し、栄養素を多く含む食料が実り、それを調理し食事という形で身体に必要な栄養分を摂り入れることで健康を育むというものを実感したからである。中でも合宿中に世田谷・棚田倶楽部の方々が用意して下さった料理の数々に幾度となく舌鼓を打ったからである。特に切干大根と油揚げと人参のきんぴらの味が鮮明に記憶に残るほどである。世田谷・棚田倶楽部の方々が手塩をかけて育てた作物がこれほどの素材の味を引き出したことにただただ感嘆するのみである。

また初めて、農作業に従事してみて農作業が軽い気持ちでできるほど容易なものではないということを実感し、今一度噛みしめることができたのである。何故なら、長年蓄積した経験や右往左往しながら創意工夫してきた世田谷・棚田倶楽部の方々の手際の良さを直視すると田んぼでの自らの行動が如何に思慮浅いものであるかを痛感したからである。今後も田植えに参加する機会があるのならば、今回の合宿で多少なりとも田んぼでの身の振り方を活かしたいと考えるのである。また来学期の9月に行う収穫では、更なる農作業の理解を深めたいと強く考えるのである。

参考文献

- ・『日本農業のグランドデザイン』 蔦谷栄一著 農山漁村文化協会 2004.11.25
- ・『21世紀の水とコメ』 綿抜邦彦 都留信也 秋吉祐子 増子隆子著
北星堂書店 2006.11.30